

矢野峰人著

新訂
『**文学界**』と西洋文学

学友社刊

著者略歴

明治26年 岡山県に生れる。
本名 禾積(かづみ)。
三高を経て京大英文科卒業。
三高・台北帝大教授、都立大
・東洋大学長を歴任。
著書「黙禱」、「幻塵集」、「影」
「蒲原有明研究」など。
現住所 東京都世田谷区深沢
2-14-17

新訂『文学界』と西洋文学

昭和四十五年九月十五日 発行

定価 九〇〇円

著者 矢野峰人^{やの ほうじん}

発行者 中安善嗣

印刷者 春山宇平

東京都新宿区東五軒町二六

発行所 学友社

電話 東京 (二六七) 二三〇八
振替 東京 一〇七八九四

共立社印刷・染野製本

序

このたび書肆の需めに応じ、約二十年の昔公にした『文学界』と西洋文学』の訂正増補版を新装して世に贈る機会に恵まれた事は、私の心から喜びとする所である。旧稿は、はじめ、昭和二十五年九月、同志社大学人文学会の機関誌として発行されていた『人文学』第三号に掲載され、翌二十六年、その発行人であった田中祥吾氏の経営する門書房から、そのまま単行本として発売されたが、広告もしなかった事とて、一般にはその存在さえも知られなかったのではないかと思われる。

私が『文学界』に関心を寄せはじめたのは大正八九年頃の事であるが、岡崎の京都府立図書館のカタログにその名が載っているにもかかわらず、現品は消耗品として廃棄処分^てに附せられたとかで、触目の機会さえ無かった。その後、極めて稀に、この雑誌の端本を、古本屋を通して多少入手する事が出来たが、既に好事家の間で稀覯書として探求の的となっていたため、蒐集は殆ど

不可能な状態に在った。昭和三年、台北に住むようになってから、時折『内地』から送られて来る古書目録で数部在庫の広告を見た事があるが、電報注文をしても大抵は後の祭で、徒らに焦燥感を煽られるに過ぎなかった。それでも、当時渋谷道玄坂に在った玄誠堂や小石川白山上の窪川書店などの好意により、約十年間に四五十冊揃える事が出来た。そこへ、ちょうどその頃『英語青年』を編集発行していた喜安雄太郎氏から、自分所蔵のものが貸し失いなどのため端本となつていたので、もしも御所望の分が手許に有るならば進呈するとの、極めて好意的な申し出でに接した。このような長期に亘る苦心の獵書と知己友人等の援助とにより、とにかく『文学界』全五十八号を揃える事が出来た。それだけの犠牲を払って集め得たものなので、昭和二十二年台湾引揚の際にも、限られた携帯品の中に、この古雑誌を入れる事を忘れず、京都に持ち帰つたのである。そして、『人文学』のために何かを執筆する事になった時、『文学界』に関するメモの整理を思い立ったのであるが、これに先行する『女学雑誌』は、友人の紹介により、未知の間柄ではあったが当時東京女子大学教授の地位に在った笹淵友一氏から借覧する事が出来た。ただ、増刊号『うらわか草』だけは何としても手に入らなかったもので、その中の数章を玄誠堂主人芥川徳郎氏に乞うて筆写して貰い、拙稿の附録として印刷したのである。その『うらわか草』は、昭和二

十七八年頃の事と記憶するが、成瀬正勝氏から恵贈され、こうして、『文学界』は、一通り全部揃う事となった。

このように、本書は、私の長い間の関心と多年に亘る蒐集、友人知己の援助の結実なのであるが、初稿を発表した時には尚幾多不備の点有るを免れず、その補訂をたえず心がけていたが、今度一応そのまとまりがついたので、ここに「新訂」と銘打って更めて刊行する事とした。補訂の主なもの、「マンフレッド」がハイネの独逸訳を底本としたものの発見とか、藤村が『うらわか草』所載の「西花餘香」中にジョン・アディントン・シモンズの文を挙げてその出典を「秋の逍遙」と記しているのは「モンテ・オリヴェトー」の誤りである事の指摘、或は、藤村が購入愛読したワーズワース詩集は「チャンドス・クラシックス」叢書中の一卷である事の確認等で、その他、この一派の同人の追憶回想記等によって、傍証として引用した数節等である。

文中にも時折言及しておいたが、私は『文学界』同人の外国文学に対する態度に、今日尚われわれの学ぶべき多くのもののある事を痛感する。否、彼等の態度こそ、現代のそれよりも一層純粹真剣だったのではないかと反省させられるのである。

彼等は、その年齢・学歴等から推しても、外国文学を理解する上に語学力、知識等の不十分な

事を免れなかったと思われるが、それにもかかわらず、彼等は、内、国文学を熱愛すると共に、外、古きはダンテに親しみ、シェイクスピアの靈筆を称讃し、ゲーテに傾倒し、新しきはペイターに共鳴するなど、井中の蛙に墮する事無く、常に生鮮な感覚を以て異国の文学の妙趣を能く味う事が出来たのである。

そうした意味でも、本書の再刊は、心有る人には多少の共感を喚び起す事有るべく、また初心の人に対しては文学研究上の指針となり刺戟となり得るのではないかと信ずる。

最後に、本書の脱稿に、直接間接に協力援助を賜わった諸氏に対し、衷心感謝の意を表する。

昭和四十五年三月十一日

著者識

目次

序	1
---	---

『文学界』と西洋文学	1
------------	---

『文学界』の意義(1)——『文学界』の創刊(2)——『文学界』の独立(10)	
——『文学界』同人と表現(13)——西洋文学との接触とその摂取(30)——『於 母影』(36)——ゲーテ(39)——シェイクスピア(43)——バイロン(57)—— テームスの『英文学史』(60)——ワーズワース(66)——グレイ(71)——シエリ イ(74)——シモンズ(77)——ダンテ(78)——キーツ(83)——ランドー(88) ——ロセッティ(91)——スウィンバーン(99)——テニスン(101)——ペイター (102)——結び(110)	

索引	118
----	-----

『文学界』と西洋文学

わが国近代文芸の萌芽は、『文学界』に於てはじめて見られる。然し、それは単なる近代日本のロマンティズムの抬頭のみではなく、日本文学の伝統を継承しながら、泰西の思潮と詩文とに育はぐまれた新しい感性の発動であった。勿論、それ迄に翻訳や翻案によって移入された欧米の詩文の数は、必ずしも少なくない。殊に明治十年代に行われたスコット、ディズレイリ（ピーカンズフィールド卿）、シェイクスピア、ジュール・ヴェルン、リットン卿等をはじめ、ディケンズ、デューマ等の作品は相当数に上つて居る。然し、これらは、もともと啓蒙を目的として移植されたもので、文学者自身の原作に対する深き熱愛と、それを細かく研究する事によつておのが詩囊を肥やすと共に表現の手法をも学ぼうとするような創作家的意図に出たものではない。そうした意味では、詩壇に於ける『新体詩抄』も『於母影』も、これら数多くの翻訳文芸と、殆ど軌を一にすると云つて差支え無い。

然るに、『文学界』同人の西洋文学に対する態度は、これら先蹤のそれとは全く異なつて居る。彼

等は、先蹤の対象としたものが、広きは社会の啓蒙・改革、狭きも文壇の啓発・向上であつたのに対し、全く個人の生活、即ち彼等自身の内面的欲求の満足を以て主目的とした。即ち、自覚の程度は問題であるにしても、とにかく、彼等は、生活の指導原理を、人生を見る眼を、創作の糧や手法を、時としては自己表現の仮托の手段を、泰西作家から学ばんとしたのである。従つて、作家・作品に対する選択の動機は、常に全く個人的・主観的であつた。これ、彼等が、ルソーによつて眼を開かれると同時に、シェイクスピアを愛読し得た理由であり、ダンテと共にゲーテを抱き得た理由である。斯くして、彼等の人生観・女性観・文学観等は、新しく育成されると共に、その表現も亦、在来の日本文学には見られなかつた清新さを帯びるに至つた。

雑誌『文学界』のわが文学史上に於ける意義は斯うした点にあり、従つて、彼等同人の上に及ぼした西洋文学影響の跡を辿る事無しには、これを十分明らかにする事が出来ない。

それでは、このように重大な意義をもつ『文学界』は、如何なる意図を以て創刊され、どのような径路を辿つて行つたか。

這般の消息に関しては、主として、名実共に雑誌刊行の全責任を負うて居た天知星野慎之輔の回顧

録『黙歩七十年』や、創刊当初より参謀格の位置に在って彼を援けた禿木平田喜一の回想記『文学界前後』および、彼等同人の著作に散見する言及等に頼らざるを得ない。而も、当の盟主天知の回想にさえ、時としては記憶の誤り無きを保し難く、その説明曖昧にして隔靴搔痒の感を懐かしめる事も亦珍らしくない。従つて、雑誌創刊の経緯に就いては、天知説を中心とし、これをば彼の関係した雑誌の提供する傍証によつて明らかにしてゆくより他に方法がない。

『文学界』創刊号の巻頭には左の一文が掲げられて居る。――

発行緒言

方今文学雑誌の類名あるもの少からず而も文界の域漠々として際みなく徒に諸氏のみを勞せしむべからず吾曹の任務尚尽きざるべからざるものあるを信ず、本社曩に発兌の雑誌を分ちて白表赤表の二巻とし一は益政治社会時文と關係を厚ふし、一は愈實際の域に進みて家庭に友たらんことを期せり而して今や文界の友に向ては此「文学界」なる冊子を發し社員社友の斯道に志ある者相集ひて互に其得たる所思ふ所を述べ我好読者と共に興味得て言ふべからざる文界に逍遙遊し併て

志篤く便り少き人々のために好脩養場となり指導者となり又人々が一場に会して道に語り想を練り文を研くのたよりとなり以て他日の大成を待たんとするものなり

さばれ微々たる一小冊子素より此重任に当るに足らず其体裁の不完全なる其単調にして趣味に乏しき等短所少からざるべく幾多読者のために寸毫の補あるを知らずと雖も唯名を求めず誉を受けず誠実に勉め励みて斯道のために幾分を尽し隠れたる秀才を同好の間に紹介し又初学の人々のために懇ろに備へんことを期すべし、されば今の文界の表面に出でゝ別に一派の旗幟を立てんことなど此冊子の志にあらず

女性の雑誌として女性全体の事を記するもの世既に多々有益なるものあり而して今や女流文学の氣運に向ふて其友たらざるを得ざるものあり、特に女文欄なる欄を設け書学ぶ女性の機関に備へんとす、勿論弊社の「女学生」の任は此冊子の負ふ所にして尚又同盟諸子の求めに応じて尽し且つ広く女性の投寄を得んことを望む。(後略)

この「緒言」の冒頭に言及されて居る「白表」「赤表」並びに末尾に近く見出される『女学生』に就いては多少の説明を要する。そして、これを説明する事は、やがて『文学界』創刊の動機を明らか

にする事になる。然し、それには先ず、天知自身をして語らしめねばならない。即ち、彼は、『文学界』発行当時の様子を話してくれという問者の需めに応じて次の如く語って居る。――

私が明治女学校教師時代に、頻りと高等理想の文学奨励の事を主張して居つたので、其編輯を手伝つて居た女学雑誌の寄稿中で、異彩ある透谷の事を知つた。其頃藤村は未だ筆を執らなかつたが、私も此兩人も何れ巖本の傘下に集まつた者で、基督教が土台の文友である。

その透谷や私の文章が追々と女学雑誌に集まる頃から、その建前上、重苦しくも難解にもなつて、巖本晶を荒すやうになつて来た。此潮流を巧に分岐させたのが白表女学雑誌で、之は私の受持で、社会改良の論説、文学上の批評、人物論又は詩歌、俳諧、小説などの類を載せる事とし、赤表の方は旧態を維持して、各週交々発行する事となつた。

斯くて私の雑誌は女学生と白表女学雑誌と二種になり、一は修身道話を主として文学を加へたもの、一は欧米文学を借りて日本文学の思想を向上させやうと勉めたものだが、何れも婦人思想の向上にあつたのである。私の此抱負が後に文学界同人の純文学説に飽き足らなくなつて来たのであつた。

さて女学生雑誌も二十号を越える頃は、文学趣味が勝つて来て寄稿文が溢れるやうになり、大

いに文学の氣勢を挙げ始めた。それが臨時に夏期号外を出さねば納まらぬ事になつたのである。之には禿木、透谷、湯谷紫苑、川合信水、それに隠居と云はれた藤村も無声の名で初めて筆を執るし、星野夕軒も人氣に動かされて前後たゞ一回の一文を掲げた程だ。私は又一休禪師と怪しの木像の二文を載せるといふ始末で、若々しい元氣の横溢するのが頼母しく思はれた。此号外が好評で忽ち売切れになつたが、白表誌との區別が出来なくなつて来た。尤も之は号外だけで再び常態には復したが、年末、三十号を出す頃に巖本社長から動議が出た。それは此二誌を合流させて本誌の文学部とし、透谷を推立てゝ女流文学に尽力するやうにとの事であつた。私は異議なく承諾して直様、島崎から透谷へ交渉を依頼した所、たゞ客員として尽力したいとの事であつた。其頃の透谷は三十一二に見えて、早くから貧乏修行で世故には長けて居たが、態度は詩人的で、迎も定期の雑誌編輯など思ひも寄らぬ事と考へたから、余儀なく私が引受ける事にした。

右の通り、二雑誌を廃刊して新たに新雑誌発行と迄になつたが、其中堅はどうしても私と平田に帰着しなければならなくなつた。何故かと云へば、透谷は前述の通りだし、島崎は突然流離の旅へ出るし、秋骨は未だ筆も執らないからである。他に誰も頼みに思ふ者は居ない。其相談に乗る平田君でさへ、文学方面は力になるとしても、印刷や発行編輯の事務などに付ては、余り年少

で相談相手にはならぬ。そうこうして居るうちに、早くも新年を迎へて仕舞つた。併し私は余程宗教熱が旺んの頃で、善事は必ず成立つと信じて少しも動じない。云々。

これによると、『女学生』と『白表女学雑誌』とは、共に文学趣味横溢のために区別がつかなくなつたので二者を合流させようという事になり、その結果生れたのが『文学界』だという事になって居り、従つて、それ以前に在つた二雑誌は廃刊された事になって居る。この天知文は、もとより四十余年の昔を回顧したものであるから多少の誤りなきを保し難い。茲には、『女学生』と『白表女学雑誌』とが合併して『文学界』となつたと言つて居るが、それは事實に反し、また『白表女学雑誌』もそのため廃刊されたように記されて居るが、この雑誌は『文学界』創刊後と雖も存続して居るのである。即ち、『文学界』は、上掲「発行緒言」中に『女学生』の任は此冊子の負ふ所にして」とあるのや、更に、『白表女学雑誌』三四〇号に出て居る広告文中に、

先づ「女学生」を別置し近頃之を拡張して「文学界」となし次に白表赤表の二色に分ちて阿々相對せしめたる者は即ち此の故也。而して如今機至りぬ当に赤白をして分袖独歩せしむべしとて軌はち茲に白表女学雑誌に別題を附し改めて「評論」と称す。

とあるのを見ても知られるように、『文学界』は『女学生』の発展したものと言うべきであろう。また、『白表女学雑誌』が『評論』と改題されて第一号を出したのは、明治二十六年四月八日の事であるが、「白表」は、『文学界』創刊後も、依然一、二、三の三箇月間刊行されて居る。ただ、問題となるのは、何故に『文学界』が一号および二号共、『女学雑誌文学界』と呼ばれねばならなかったかという事である。それは、この雑誌の「発行緒言」並びに、明治二十五年五月廿八日発兌の『女学雑誌』三一九号所載広告文に示された『女学雑誌』改正の理由等によって案ずるに、「白表」が青年子女を対象として「政治、社会、時文と関係」深きものを収め、「赤表」は「晩学又は老成婦人の為に」「家政、児童、理学のはなし、問答、烈女賢婦の伝記、育児、看病、小供のはなし」等を「成るべく多く掲げ」るものとしたのに対し、『文学界』は専ら文学を要求する者のために創刊されたのであるから、白表を甲号と呼び赤表を乙号と呼んだ彼等の呼び方に倣うならば、これは正に『丙号女学雑誌』とも称すべきであるのを、『文学界』の名を特に大きく出す事によって特色を明示し、「女学雑誌」の方を肩書的に用いたのではないかと思われる。

因に、この『女学生』は、天知に従うと、もと明治女学校内にあった愉観会という遠足会の回覧雑誌が発展して出来たもので、明治二十三年六月に創刊号を出して居る。その目的は、曩に引用した天

知文に見られる通り修身道話によって人格を高める事を主眼とするも、かたわら、文学思想を奨励する事にもあったから、これが『文学界』に発展した事は、その目的がいつしか主従所を換えるに至ったものと言える。

『文学界』はこのような径路を経て発行される事になったのであるが、編輯主任候補者との交渉等に暇どり、かつそれが失敗に終りなどしたので、愈々編輯に着手したのは二十六年一月になってからの事である。天知の当時の日記を見ると、一月十一日の所に

夜、新雑誌編輯着手。同二時半まで平田君と胸秘を闘はす。弟男三郎亦同座。

とあり、また十六日の所に「雑誌創刊号編輯」と記されて居る所より推すと、『文学界』創刊号の原稿は少なくとも年末に依頼されて居たのであろう。尚、玆に男三郎とあるのは天知の弟で夕軒または夕影と号し、庶務を担当した人である。二十日の日記には「雑誌出版用多忙」とあるけれども、禿木の原稿が二十五日になってやっと到着して居る所を見ると、玆に「多忙」とあるのは、編輯事務と印刷所並びに売捌店との交渉などに忙殺された事を意味するのではないかと思われる。とにかく、この二十五日には徹夜して編輯し、印刷所秀英舎の特別尽力を得る事に奔走したので、創刊号をば辛うじて三十一日に発行する事が出来た。天知の日記によると、これは、「好評湧くが如く」初版千五百部